



競争的過ぎる国際学会の話

神戸大学 経済経営研究所

准教授 高槻 泰郎

私事で恐縮だが、2019年11月より8ヶ月間、シンガポール国立大学にて在外研究を行う予定である。滞在中は、校務を他の先生方（主として岩佐和道先生）に負担して頂くことになるため、ご迷惑をおかけするが、この貴重な機会を最大限活かしたいと考えている。

筆者を *visiting scholar* として受け入れてくれたのは、同大学経済学部の SNG Tuan Hwee 先生で、彼とは 2013 年にハワイ大学で開催された数量経済史の国際学会 *World Congress of Cliometrics* で知り合い、同世代ということもあって意気投合した。彼はこの学会で、徳川日本と清朝期中国の租税体系や公共投資のあり方を比較する、一橋大学の森口千晶先生（先生、と呼ばれることを嫌う方なので、以下では森口さんと呼称する）との共著論文を報告し、筆者は江戸時代に行われていた旗振り通信が、米相場の形成に与えた影響を分析した単著論文を報告した。

この時、彼と行った意見交換が、今回の滞在に繋がるわけだが、本コラムの主題はそのことではなく、この学会そのものである。

というのも、この学会では、報告者は論文を報告してはならない、という珍しいルールが適用されていたのである。全ての報告論文は、事前に学会のウェブサイトでダウンロード可能になっており、さらにご丁寧なことに、それを紙焼きした分厚い論文集まで郵送されてくる。つまり、この学会に参加するならば、自分が参加するセッションの論文を事前に読んでこい、というわけだ。

だからこそ、報告者は学会当日に論文を説明する必要はない、ということになる。報告者は与えられた5分間で自分の論文の概要を話し、残り時間は全てフロアとの討論に当てられる（1セッションは45分）。地図や図を使いたい場合はスライドを使って構わないのだが、基本的にはマイク1本で話すことが推奨されていた。

Each paper is devoted to a session, in which authors have 5 minutes to make an opening statement and the rest of the session is devoted to discussion among all conference participants. Conference participants are expected to read the papers for the sessions that they attend.

上記が事前に送られてきた参加者への案内書だが、冒頭5分間のトークは、論文の内容発

表ではなく、opening statement、と表記されている。つまり、報告者にはそのセッションを仕切る司会者のような役割を果たすことが求められているのである。

こうした形式はアメリカでは一般的なのか、気になったので、この3月まで神戸大学大学院経済学研究科に在籍していた Eric Weese 先生に伺った所、このスタイルは Chicago Style と呼ばれているらしく、一般的とは言えないが珍しくはない、との説明を受けた。

スライドの読み上げを常とする非ネイティブには過酷なルールだが、論文において誤解の余地なく言いたいことを伝えるトレーニングになることは間違いない。口頭で補うことはできないので、論文の中で説明が完結していなければ全く相手には伝わらない。事実、筆者の論文に対しても「徳川時代、大名同士が交戦状態にあったとすれば、どのように米の輸送の安全が確保されていたのか？」という質問が出てきてしまった。これは明らかに筆者の説明不足に起因する。論文に書いていないことは理解されない、行間を読んでもらおうなど甘い、相手の前提知識に依存しない形で書かねばならない、ということを感じた。

この学会の恐ろしい点は他にもある。全ての会場に学会スタッフが出席しており、報告内容はもちろん、フロアから誰がどのようなコメントをしたか、そのコメントは有効だったか否かを審査しているのだ。発言をする際は自分の名前と所属が書かれた名札を掲げるのだが、それをスタッフがチェックするというわけだ。

このことを知ったのは、学会開催期間も中盤に差ししかかろうとしていた時であった。同学会の Program Committee でもあった森口さんが「コメントできてる？」と聞いてきたので、「いや、全然ですね、聞くだけで精一杯です」と答えたところ、それがいかにダメなことなのかを烈火のごとく説教、もとい説明された。つまり、ここでセッションに貢献できていないとスタッフに判断された場合、次回、同学会にエントリーしても落とされる可能性が高まるのだと。

この設定を知ってから、改めて会場の様子を見ると、なるほど確かに、ほぼ全員の参加者が挙手をし、盛んに質問をしている。いや、大学院生の参加者は、そのような生やさしいものではなかった。報告者の opening statement が終わるや否や、名札をブンブンと振り回し、報告者に指名してもらったら直ちにコメントをまくし立てる、といった光景がしばしば目に入った。

コメントできていなかったことを棚に上げて偉そうに言わせてもらえば、空回りしているコメントも少なくなかった。自分のアイディアの斬新さをアピールしようという気持ちが前面に出すぎて、論文の意図を汲んでいないケースも見受けられた。しかし、こうやって自分の名を売っていくのかと愕然とした。北米ジョブマーケットの過酷さを垣間見た気がした。

このままではまずいと、次の日から「予習」を心がけ、コメントを用意してからセッションに出席するようにした。しかし、時既に遅し。おそらく私のコメントは目立つものではなかったと思われる。

なぜそう言えるか。この学会では、打ち上げが用意されており、最終日にレストランに集まって全員で飲食を共にするのだが、そこで各賞の発表が行われる。そこでは報告内容

はもとより、フロアからのコメントについても評価対象となる。残念ながら私は何の賞ももらえなかったので、私のコメントは貢献を認められなかったことになるが、それはひとまず置く。

この授賞式では、良い意味での表彰だけでなく、以下のようなユーモアたっぷりの賞も授与される。例えば、うるさかったで賞（コメント回数が最も多かった人に贈られる、副賞はマスク）、ポジティブ賞（コメントに対して“Yeah! I can do that!”と答えがちだった人に贈られる）、ネガティブ賞（ネチネチとした質問を多くした人に贈られる）、等々。こういった賞が授与できるのも、各会場に「監視役」が派遣されていたからこそ、であると考えれば背筋にヒンヤリしたものを感じるが、競争をあおるだけあおっておいて、最後にそれをみんなで笑い飛ばす雰囲気は、決して悪くなかった。

実は、この学会で私が最も良いコメントをしている人だと思ったのが、シンガポール国立大学の SNG 先生であった。彼はガツガツとしたタイプではなかったので、受賞対象にはなっていなかったが、論文の狙いを把握した上で建設的なコメントを繰り返しており、なるほどそうやって論文を構築していくのかと勉強させてもらった。もちろん、彼が報告した論文それ自体も素晴らしかった。その後、彼と親しく話すようになり、今回の在外研究に繋がった。

人から受ける評価を競う、清々しいばかりに競争的な学会に参加して得られたのは、淡々と効果的なコメントを繰り返す、尊敬すべき友人であった。